

The ORPHAN シリーズ 小説

# *Double INNOCENCE*

The ORPHAN (白の功罪)

## 注意事項

このPDFファイルは、「スペースノイドの孤児(みなしご)たち 小説館」ブログに掲載し完了した小説を、PDFに変換したファイルです。

**このPDFファイル及び、当該ブログに掲載する小説、小説に使用している挿絵の一切の著作権は作者にあります。**

作者に無断でPDFファイル及び小説の引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売する事を一切禁止いたします。

小説の紹介や個人用としての印刷、個人用途での保存に関してはその限りではありません。

シャトレイサ・シアノグラ、十九歳。

少女でも無く、大人でもない。イデオロギーもプロパガンダも知らない。

「彼は優しくない」。そういう感じ方は「唯の我儘」なのか

「歪みを指摘したサイン」なのか。

その出逢いは「危険」なのか「怠慢」なのか。

一部の国や企業が経済の力任せに、

破綻した国々を買収取った国境無き混沌の近未来地球で、

理不尽な戦いは、最新兵器を駆る彼女を否応無く自律に追い立てる

決して彼女を不幸だと思ってはならない。

決して彼女に同情し、共感してはならない。

そして、これは悲劇ではない。

何故なら、それはあくまで「他人の人生」だからだ

## わたしの想い

『貴女は人殺しになったの?』

必要なら、そうもなりますし、

人がそう思うのなら仕方ありません

『…仕方が無い……。貴女が人の命を手にかけるたび、貴女の心も少しずつ死んでいくのよ。でもそれは私のせいかもしれない』

時代を言い訳にしないのですか

『母親とは、そういうもの。何かにつけて理由は、自分のせいか子供のせい』

歪みを享受すると言っているのですか

『痛みがあるなら、これが人なのよ』

私は、朝が嫌いだった。

午前十時の若くて青い光は大好きだったし、  
禍々しいほどの朝焼けも美しいと思ってた。

でも、空が白けてから日差しが自己主張を確定するまでの時間帯、  
この世のあらゆるものが動き始める、

静寂が破られる瞬間の騒々しさが私には辛かった。

夜、一度太陽は死んで、昇ってくるのは再生の証だと言っ。

何故、私は命が甦るその喜びを味わえないのだろう。

夜のような孤独な時間が続くなら、  
いつまでも闇が留まればいいのに、

朝は確実に必ずやってくる。

どうせ

どうせ朝が来ない世界を望むなら、

この煩わしい地球を脱出して、

途切れない低音の響きの中、

さんざめく星達の囁きを肌で聴きながら漂流したい。

私が願うのは、それだけだったと思う。

私は……

そう、この星が ……

「生まれてきてごめんなさい」とか、  
「生きる資格は無い」などと言う考えとは無縁のはずだった。

と言うよりも、もしかしたらそう思う年齢を過ぎてしまっていたのかもしれない。

もはや子供でもなく、しかし大人でもない、彼女にとって微妙なそのバランスを保つという課題は、煩わしくも必然的に訪れていた。

その息苦しさから享楽へ走る衝動も、情熱に生きる体力すら持たない、その忖度の無い精神移行の道中にはただ、家族は離散したのだと言う事実が横たわっていた。

長く生きた人々のまやかしが造りだす、理不尽な世界を感じるにつれて、結果の見えてる期待感を抱くのも諦めの原因であるのだろうか。

追いつがる罪悪感を振り切って、嫌悪に苛まされるのであった。

時折、これほど人間が煩わしいと思うのは、自分だけだろうかと恣意の海に浮かんでみる、悪い癖が出来てしまっている。

そんなまどろみの底から、ふいに現実に引き戻された。

「ねえ、シャトレイサ」

見慣れた少年の顔が目前にある。

「……………あ……」彼の名を口にしようとして、声が喉の奥に引っかかった。

「ここにしか来るとこ、ホント無いんだなあ」

嫌味は含んではいない。

「他に行くところもないし…練習生は外出も管理厳しいし……………」

ぼそぼそと言いつつ断った。

「そんなに宇宙へ行きたいならさ、ルナ・ベースに入れば良かったのに」

「無理だよ。家飛び出しちゃって、アタシ的にここしかないし。…ミレイヤはぶっしたの」

「それこそ個人的な話だよ、シャトレイサ。僕だって一人で出歩かさ」

シャトレイサは壁に寄りかかって小声で囁いた。

「ヴォロス・チームは戦争に出るんだよ」

まるで自分に言い聞かせているようだ。

「楽観はしてないって」

負けずソトーも返す。

いつ死んでもいいのかもしれない。決して死というものを恐れていないわけでもないが、これも人間の特権なのではないかと思う。

でも　　彼女は願う。

価値ある死を望むのは悪くないことだ。大儀も正義もいらないけれど。

「第五世代がどこに配置されるか知ってる？」

話題を変えた。

「アフリカの北部ってくらいしか」

グレート・ブルー・ネット  
「G・B・Nを無駄に死守せよってことね」

「戦争の新人投入していいのかなあ。曲がりなりにも最前線じゃない？」

「さあ…どうせテスト部隊だとしか考えてないのかも」

「お金、かかってもそうなんだ」

生死がいかなるものかが、認識できない子供の会話のようである。

二人はそこを引き上げて、自らの学び舎やに戻ることにした。

長い渡り廊下を抜ける途中で、広大な芝生の上に足を乗せる。

いつもよりは澄んだ青空だった。

「ソトーは、ご両親に言った？」

「まさか。ここに入るのだから猛反対だったのに、戦場に行くって言ったなら殺してでも止やめさせられるよ」

「苦労は聞いたよ。でもクラファからウオクトワイスの保護を受けに、その…寝返ったなんて、その程度のこと言われた位で、ソトーが反発すること無い……」

「…反発とかそんなんじゃないよ。親がそんな陰口たたかれてるの見たら、子供がこんな風になるってこと、どうして」

「ソトーが荣誉ある戦績を残したりしたら、彼らはソトーの両親に言うんだよ。『立派な味方を育てた偉大な親だ』とか、『これでウオクトワイスに恩を返したと思うな』とか、『賛否両論の大きなお世話言いまくり。結局ソトーと言う独立した個人で評価はしてくれない。しかもそれぞれ人は嗜好があるから自分の目に付いた好き嫌いではしか判断しない』」

「……でも僕は、親がそうだったからではなくて、親がそんな苦い立場にあって、子供が同じ苦味を味わってても、親が子供の前途を心配するほど悪い作用はしてないって、判ってほしいん

だ」

「いい子だよねソトー。私にそんな親の立場も考えた行動ができたら、ここには居なかったと思う……」

「戻る気もないくせに」

「…代弁、ありがとつ。でも戻る道も分らないのが、正直な話」

ソトーには、喋りやすい。

感情はストレートに顔に出るくせに、言葉として発するには勇気のあるシャトレイサである。

声を出して泣いたりとか、怒りにまかせて叫んだりとか、勢いで問いただしたりとかは、苦手だった。

親からはそうした吠え方を習ってはいないし、もの静かなインテリジェンスの育ちをしたためだろつ。

こみ上げた感情は、涙も流さないように飲み込む癖がある。

しかし人間のいる環境は自閉的な殻を許さない。

絶え間ない人間関係で、過剰に反応したシャトレイサの防衛本能は、硬直したような合理的判断と、オブラートを剥いだ言葉で武装することに従事してしまった。

見た目で判断しがちな世間一般の視線は、「大人しい子」「普通すぎて目立たない子」との評価を下し、秘めた感情を無反応と判断する。隠すことは許されないのだ。

そして彼ら自身の判断が欺かれると、驚愕と警戒、好奇のエネルギーを注ぎ込んで、異端を排除しようとする。

特に、自分たちより優れていた場合の嫉妬と、理解ができない場合に。

そんな普遍的な模式図が、シャトレイサには我慢がならない。

(自分たちの知っていることが、全てだと思っている狭量に気が付かないなんて…)

さしずめ狭義的に『無知の知』といったところであろつ。

シャトレイサも自身の社会的性格が、視野を狭めているのは知っている。

だが、ヒトには個人における限界もあり、模式図も伸縮するというものだ。

そんな馬鹿馬鹿しさに反発する復讐心理をも醸す言動は、衝動的に不意をつく言動を誘発して、周囲の反応を楽しむ快感の味を知り得た。

それで少しは自身の鬱屈したストレスを解放できてるならばいいが……。

(自分に対する言い訳……)

自覚だっできていてる。。。

もし、そんな感じの話をする事ができたら、ソトーは理解してくれるだろうか。  
もっと違う、正確で核心的な言葉をもらえるだろうか。  
隣を歩く、少年が嫌いではない。

少し鬱陶うつたうしいときもあるが、彼はシャトレイサとの距離を無理に詰めるタイプではなかったのが、彼女にとつて幸いしていた。

（ 君は、優しいの ？ ）  
そつと心に思った。

（でも話すには…勇気がある…）  
愛情の告白にも似た緊張感を伴う。

それにも増して、他人を受け入れることが何よりも恐ろしい。

（人は、コワイ ）  
サクサクとよく刈り込まれた芝生の上を踏む。  
二人の行く先から別の声がした。

「ソトー！シャトレイサ！」  
どちらかと言うと、ソトーを迎えに来たミレイヤだった。  
伸びやかな肢体を走らせて、彼女が寄ってくる。

「今日、「面談」よ。忘れたの？」  
「でもまだ時間があるじゃないか」  
「やだあ。集合時間が変わったの、忘れてるんですよ」  
「いつ言ってたんだよ？」

「昨日のセミナーでよ？いいわ。迎えに来たから」  
満面に笑みを浮かべて、ソトーと話していることの喜びを隠そつとしない。

そんな少女のあげすけな言動は、シャトレイサには厭いやらしく感じる。  
女性的な魅力を更に強調したような大げさな仕草と、女であることを否定しない物言いは、  
い  
つも嫌悪感をもたらすのだ。

だからと言ってミレイヤに罪はない。自身も彼女が嫌いではない。  
（ただ、これからのことも考えて…この場には不謹慎…）  
どちらかというど、言い訳である。

感情は、嫉妬と羨望  
。  
女としての女性性か。

白い建物内に入る前、三人は大声で呼ばれた。

「遅刻ですよ！」

一喝されて急に思い出す。

「…任務だった…」

ここは、学校ではない。

「コーミル大尉、こちらが第五世代『ヴォロス』の戦略プログラムチーフ、ライナル博士です」  
よろしく、と無精ひげですら気取ったようなキャラクターで、細面のライナル博士は手を差し伸べた。

「一応、適性検査は受けての選抜チームだが、どうなのかね」

「生徒達との相性もありますし、マシンの開発も完璧とは言えませんが、言ってしまつとどのアイテムとっても実戦投入無しには何とも」

軽く言つてのけた博士の態度が、無骨タイプのコーミルには受けなかつたらしい。  
振り向いてすぐ後ろにいた男に愚痴る。

「我々は戦闘のアイテムだそつだ。名称を変えるかねクライン大尉？」

「コーミルとは正反対に見える、控えめに佇んでいたクラインと呼ばれた男は、苦笑した。

「仕組みを考察しますと、指揮権は半減しそつですね。ですがコーミル大尉も実戦で鍛えられた方でもありますし、経験重視の点を踏まえると正論です」

「………と言つわけだ。私に友軍はいないらしい。おとなしく博士の講義を受けるとしよう」

カツカツと足音よろしく、コーミルは大股にライナルの前を掠めた。

「まだ貴方たちもテスト段階なのですけどねえ。どうぞ研究室へ」

はて、と頭を掻いてクライン以下残された数名を案内した。

向かう研究室の途中で、研究員とは異なる面持ちの、そしてこの場に似つかわしくない若者とすれ違つ。

「彼らが生徒たちですよ」とライナルはいかにも学校の教師のようだった。

「今回の卒業生は十一人、チーム編成は三人から四人で一チームを予定しています。それについてのコマンダーは適性検査の後、然るべきチームと組むことになってますが……生で研修され

るからには、コマンドアの精度を是非とも上げなくてはなりませんね。

で、ウォクトワイズ

は本気で彼らを第一線投入を？クライン大尉」

「ウォクトワイズはそのように指示してます」

「しかし性急すぎやしませんか。あそこは中立地帯の協定を結んでいてもその実、水面下の激戦地なのは、いくらなんでもご存知のはず。ましてハーレイ・クラファ」

「政治屋がすることは私の範疇はんちゆうではありません。命令があり、敵がいるので勝利を努力するか、我々の生きる道は無いのだと心得ているつもりですが」

淡々とした答えは自らに言い聞かせているにも見えた。

一行は研究室の入り口へ立つ。

「……………他の世代は、まあまあ順調ですしね。無駄死になさらないよう、サポートしましょう。クライン」

改めて挨拶するようにライナルは手を差と伸べ、クラインもその手を握り返した。

「クライン・カノーヤーです。足手まといにならないければ良いですが」

名乗った名前に、(おや)とライナルの顔によぎる。

「カノーヤー……？子息ですか？」

「似た名前はいくらでもありますよ」

クラインはダークブラウンの髪を掻き揚げて微笑した。

入った研究室は広い間取りで、こぎれいに整理されていた。

数人の研究員らしきスタッフ、いくつかのモニターをはじめとするハード機器、不可解なヘッドセット云々……。

「お席にどうぞ。こちらのヘッドセットを装着していただき、生徒たちのパターンと組み合わせる最良の結果が出たら、チームコマンドアを決定する手順となっております。あくまでデータ上のお話ですので、私に決定権はありませんが」

「専門家の判断が決定権を持つのが当たり前だ。謙遜けん遜する必要は無い。ライナル博士、生徒たちは何処なのかね」

「コーミルの質問に、研究員が指示を出すと、壁に見えていた部分が一面透明なガラスに変わった。その外には、見下ろすように作られた別室に、生徒たちが集められている。

彼らは既に奇妙な装置を頭に着けていた。

「向こうからは見えていません。が、コマンドアが来ることは彼らにも言っています。確定的な

「タが得られた場合は、機関を通して軍とすり合わせの上、生徒と指揮官を然るべき処に配属になるそうですが、現時点で生徒と指揮官の顔合わせはありません。また、シミュレーションで相性が良かったとしても、そのまま現場に反映されるかは不明です」

ライナルが指を鳴らす。

窓が閉鎖され室内が減光された。

「これから戦闘シミュレーションを彼らと行います。スタートしてから暫くの後に、プログラム内では自動的にコマンダーとパイロットの四人編成に分けられる仕組みになっています。具合が悪くなった方は拳手を」

クラインは、コーミルの左手がモゾモゾと動くのを視界の隅に感じた。

## Mission 1 野望の故郷

ランドキャリアと言つのは正式名称ではない、とはフレッチャーのささやかな主張である。こと巨大な推進装置を搭載し、バイク型戦闘機を積み込む母艦には不似合いだというのだ。

水面航行やある程度の飛行能力など、空間の移動にあらゆる機動性を活かして、世界の流通業界を飛躍的に成長させた貨物機を総称して言ったものが、軍用にも転化されたものである。

そして、アフリカの前線に投入されたランド・キャリア“イバロ”も、非生産的な現場へ投入された新造艦であった。

「……………またシャトレイサが？」

メナムは眉をしかめた。

「こまるなあ…掃除、大変なんですよ」

よほど彼女に直接聞かせたいところだが、レジーヌの表情で続けるのをやめた。

「これも技術担当の仕事だと思って。悪いな、あれでも大事な戦力だから」

軽く振った手を頭に、髪をほぐしながらレジーヌは立ち去った。

「オレは掃除屋に転職か…」

半ばばやきながら、脚立の上から“ヴォロス”のコクピットを覗き込んだ。

コクピット内の計器は被害を免れたが、床と左側の壁沿いに吐瀉物が一面に散らばっている。

「出撃のたびにゲロ吐くヤツなんているかよ」

現場を見る限り、彼にとってはその戦力は疑わしい限りだった。

その犯人は医務室に直行し、スーツを着たまま診察を受けていた。

「もつとこう、ラフに受け入れてもらえませんか？」

ネルが首をかしげる。

「反発しちゃいけませんよ　コントローラは貴方が戦闘に勝つためであり、貴方が生き残るための道具です。ラボではこんな反応無かつたんですけどね…予想外ですよ。第五世代ファイフスで何故こんな現場で拒絶反応が起きて吐いてしまつのか、あなた自身を解析してもらつことになります」

疲労の濃い顔で、シャトレイサは深く嘆息した。

「気分が悪いんです。休憩を要求します。それに、うがいがない」

ネルの返事より早く、シャトレイサは額の上のコントローラーを外すと、医務室の隅で顔ごと

洗いだす。

「安定剤を出しておきますから、服用を忘れないでください」

「私のデータ、どうするんですか？」

「ウオクトويسなどの各研究所に送りますよ。原因究明次第あなたに合うシステムを組み立てるもらうじゃないでしょう やれやれ、ここまで判りにくいタイプもどうだか。催眠術にかかりにくいってのは、あなたのような人ですよ」

肩をそびやかすネルに、シャトレイサは無言でコントローラを投げた。

「多少の改良は試みますが脳への負担もありますので、あまり改造するわけにも行きませんしね」  
カップを片手に、医務室を出る。

「初めて死体を見て吐かない人間がいるのか……？それと同じだろう……」

シャトレイサはまだその死体を見たことがない。シミュレーションでだって死体は出ないし、機械が壊れるだけだ。まだ数えるしか出たことのない実戦で、何をしたともいえないレベルである。

いい加減な気持ちでここに来てしまったのは否めないが、大儀も正義も理想も彼女には皆無で、良い事が悪い事かも判断する基準すらできていないのだ。

「大ッ嫌い……」

状況や、誰かに対して、というよりも取り合えず、こんな言葉で気分の表現を試してみた。

「シャトレイサはコントローラが嫌いなのか？」

小競り合いの戦闘が終了すると、真っ先に艦橋ブリッジを飛び出したフレッチャーがリラクゼーションルームで新聞を読みながら、向かいに座ったルンス中尉に第一報を目ざとく尋ねた。

「コントローラが彼女を嫌いなのもかもしれません。でもまだ「クビット」で外したことはないから期待する余地はあると思います」

「隊から外すわけには」

「ネルの権限のほつがあなたより強いですよ。かばう訳ではありませんが、彼女は初戦を突破しました」

フレッチャーは不機嫌に新聞をシレッダーに投げた。

そこにレジーヌが入ってくる。

「部隊指揮官が最初から不在だというのも、どうかしているとおもいませんか？ ルンス中尉だっていつまでも代理してるわけにもいきませんし」

「レジーヌ…彼の評価を下げるような言い方はよさないか」

彼女の歯に絹を着せない物言いは承知の上だが、さすがにフレッチャーは嗜めた。

「個人を攻撃してるのではありません。このような異常事態を問いただしているのです。艦長」

「尤もであるが…戦争こそが異常事態の現象ではないかね」

「拡大解釈がすぎます。それに対応できる計画性を遂行するのが必要でしょう」

埒の明かない押し問答だった。

やや論旨がずれたため、存在感が薄れてしまったルンスが割って入る。

「アタック・バイクの指揮には特別な知識が必要です。私はたまたま知っていただけですが…専門的にセミナーを受けた訳ではないので。指揮官の配備は急いで欲しいですね。改めて要請できませんか？」

会議なのか雑談会なのか、デッキから上がってきていたジョールは通りすがりに耳にした。

話の流れから、また原因がシャトレイサと知って、ジョールは表情筋を歪めて冷笑する。

「…あんな非常識を実戦に使うからだよ…」

いかにも軽蔑している素振りだ。

第三世代パイロットのジョールには、癪に障る女なのだ。

シャトレイサは彼的に「ありがとう」の一言もいえず、屁理屈をこねているような人間だと見下されてしまっている。

「この実戦配備も、実はテストなのだとおっしゃれませんか？どちらにせよ、部隊の再編成はありそうですし」

レジーヌの声がひときわ高く、耳に届いた。

胃液は苦い。

喉の粘膜を焼いて、呼吸のたびにひりひりする。

取りあえず渡された安定剤(あまり意味がなさそうだが)を流し込んで、落ち着く場所を探し、狭い艦内を歩いた。

(知らない人ばかりで…みんな青筋立ててるから、嫌だな)

そう思ってしまったのは、生来の性格ゆえと甘えが出ているせいだ。

膨大な技術と知識を詰め込むのに精一杯なのか、パイロット養成の課程には、軍隊色が薄い。死ぬほど下品で粗野な言葉を浴びせられたわけでもなく、体力の限界を超えるような厳しい訓練もあまり無かった。

温室のような育て方をしている一方で、生体テストには何かを含んでいただろうが……。

現実感の無さは、シャトレイサに平和ボケしたセリフを言わせてしまっているものの、体は正直な反応を示す。

ストレスである。

それが異常な緊張感を生み出し、コントローラの信号と相まった結果が胃にストレスをもたらしている、とも言える。

「肩も凝ってるし……」

艦後部デッキの展望室に、落ち着いた。

アフリカの太陽は痛い。

強烈な紫外線で眼や肌を傷めないように、ガラスに薄いスクリーンを張っている。

ともすれば普段着よりも着心地のいいパイロット・スーツは着替えず、上半身だけ脱いでTシャツ姿のままベンチに腰掛けた。

「……………宇宙は、平和なのかなあ……………」

見上げた蒼い空に、上弦の月が白い姿を浮かばせている。

あの衛星では、急ピッチで人が住む都市を建造しているという。都市、といっても一般人が住むにはまだまだ遠い先の話だが、ルナ・ベースと言う名で地上とは遣り取りされている。

未知の世界で「平和」もどろろかと思うが、憧れは妄想を抱かせるというものだ。

「この“静かな激戦地”で、よくもそんな事が言えるよな」

頭の上からシャトレイサの平和が破られた。

体を硬くして、最大の防御体制をとる。

「なあ？まただつて？ お前、そのうちに胃液でヴオロスを溶かしてしまうんじゃないのか？」

苦手なジョールだった。

「……………」

「まだ大した戦果も上げてないし、軍人って自覚ないんだな。甘えるなよ。お前のせいで死にたくはないし、誰もお前にだけ構ってやってる暇なんてない」

性格の善し悪しは別として、彼は正しい。だからシャトレイサは反論の余地が無い。

「なに勉強してきたんだ。第五世代<sup>ファイフス</sup>って使えない奴の代名詞になってんじゃないか。レジューも艦長も我慢してるの判らないんじゃない、お前、帰れよ」

家に。

無表情で、ジョールの毒針を含んだ説教に耐えていたが、さすがに乾いた口腔内から唾を飲み込んだ。

「家には……家には帰るわけにはいかない……帰っても……帰れない……」

抗つてはみたが、声にはできなかった。

「だんまりか？…泣かないだけ増しだつて誰も言わないさ。軍人は上官に報告する義務がある。その報告もできないだろう」

シャトレイサイじめでストレスでも解消したのか、リットは人を傷つけるだけ傷つけて、展望室を去った。

途端にハア〜と長い息を吐き、硬直を解く。

味方はいないのだ。

初めて社会に出た若者は、こんな体験を通して人生を選択していくのだろう。

(自信が無いのは、誰でも同じ……人間は、一人……期待は、裏切りによる絶望……甘えは、自分の )

刺さったジョールの棘を抜きながら、自分に言い聞かせる。

「誰も教えてくれないじゃない……方法を聞きたくても、聞き方も判らないのに……！」

他人との意思疎通に必要な、人に通じる言葉の学習が優先されるべきだった。

(コワイ …！)

急に恐怖感がこみ上げてきて、体中が強張ってきた。

(どうしたら、思ってることを口にできるんだろう )

「身体能力は申し分ないし、こころ…運動神経がしなやかで反応が早いです。ですから早期投入してみたのですが……うん……テスト・パイロットですから、いまなら部隊から外すことはできます。除隊ではありませんけどね」

ネルが決定的に言ってしまった。

「ウオクトワイスの研究所に一時、入所させた方が良いでしょう……予定のうちです。戦力の

減速にはなりませんね？」

「アフリカ宣言が事実上、形骸化しているのは否めまい？」

キースは、爽やかな空気を鋭く突き抜ける太陽の下、涼しい顔で言った。

「結局、民族と経済の壁を取り除くのは、困難だということだ」

「いや、経済的には良好と見えるが…」

「不動産って、厄介なの知ってるか？」

彼らはジープタイプ車で、暇つぶしに広大な航空基地の滑走路を走っていた。

もうすぐ輸送機が着陸するため、滑走路のゴミを確認して歩く。

「民族ってのは、大体が大地に根付いているもんだ。それが土地の領有権を主張始めたときに、

戦争が起こる。付随する富を食うためにな。…まったく、<sup>土地なし</sup>マンション暮らしの俺には関係のない

話さ。ええと、土地は誰のものでもない、与えられるものでもないってたのは…」

「どっかの先住民だったと思うが」

やや乱暴だが。内容からして自己満足的な民主主義であるらしい。

「それと、アフリカ宣言がナンなんだ」

話が当初に戻った。

「ウオクトワイスは高尚過ぎるって事だ」

強引な帰結にいたる。

かつて、いくつかの経済大国が、彼らの搾取により疲弊し破産した国々を買収して、国境を消していった。それを可能にしたのは、各国にまたがって利益を吸い取る多国籍の軍産複合体である。

その巨大企業が、先行していた宇宙開発と共に、目玉事業として着手したのがアフリカの緑化計画だった。新しく希望に満ちた未来をイメージさせて、「<sup>ポードレス</sup>新生地球」を華々しく宣伝し、そのうねりに乗じたように通称アフリカ宣言と呼ばれる「<sup>ポードレス</sup>無国境化宣言」を行ったのであった。

しかし、買い取られたかつての国々が、経済的立ち直りを見せると、<sup>ナショナルイズム</sup>いわゆる民族主義が台頭してくる。我々固有の伝統や歴史は、独立によって未来へ残すものである。独立運動は武力をもって立った。

そして戦争へ。

「おかしいよな。人類は雑種化してるんだぜ？」

世界的な混血化については、ポードレス推進にとって良い原動力となるだろう。

キースは、ざっと回った滑走路から本舎へ向けてハンドルを切った。

遠目に、ヘリポートへの着陸が認められ、既に幾人かヘリに向かつて走っていた。

誰が来たんだ、と呟きながら野次馬的に挨拶すべく、車を滑らせる。

ローターが回ったままのヘリから降りてきた、一人の人物に見覚えがある。

「よお！」

太陽を背にしたキースを眩しそうに、振り返った男はにこやかに笑った。

バランスの取れた長身に、紺のスーツ、陽の光で赤く輝いて流れるブラウンの髪を押さえて、

笑顔はさも優しそくに彼の雰囲気を整えていた。

「キース？」

「クライン！ どうした、スーツも似合うが民間企業人になったのか？」

「いや、会社は変わらないよ。ウオクトワイズから命令でね……もしかしたらサラリーマンになれっていう辞令かもな」

「緊急か？…だが何にせよ久しぶりだ。今日のことは日記にちゃんと書いておくさ。 ウオク

トワイズよりは、前線基地のほうが楽だろうに……」

「ハハ……お気遣い無く。本国には君が最前線勤務希望だと、強く進言しておこう」

優しい青年は、踵を返して片手を挙げ、キースに「また」と挨拶した。

ヘリが吹き降ろす風が、また彼の髪を乱した。

「オトモダチは、ちゃんと同僚にも紹介するもんだぜ。誰よ？」

「昔の同僚……と言つか上司と言つか」

「上官？いいねえ。あの若さで、高級軍人まつしぐらじゃないか。」

「クライン・カノーヤー大尉だ。いや、もう少し偉くなったかな」

「カノーヤー？」

「知ってるだろ。将来を考えるならオトモダチは大事にするもんだ」

キースはウィンクして、別の飛行機に乗り換えるクライン一団を見やると、再び車を走らせた。

もつともクラインは、そんな付き合いをする男じゃないが。 戦場を共に駆けた人間にな

ら、少しは理解が出来るのだった。

ウオクトワイズは、黒海沿岸に建てられた半ば水上都市にも見えるメガロポリスである。

二人の建設者の名をとって付けられたこの都市は、水面に飛び出た部分を中樞と呼び、そこから放射状に橋やパイプラインが伸びている先をサイドタウンという。

「造船ドックが火災にあつたそうだな」

エリアの政庁舎の一室。

あまり公にしたくなさそうな雰囲気、二人の男が立っていた。

「支障は無い。他の工場に空きがあるから、ラインを移すつもりのようなが」

興味のカケラも無さそうに、ユロは応えた。

「物を載せるだけの船を作るよりは、次世代マシンの開発が大事だろう。予算も組んでいるし、役員会の承認も得ている」

「それなのだが……暫く凍結できないものか？ ブルーネットのポンプ修理に手間取りすぎる」

「あれはもともとレンロウの受注区域ではない」

「委員会が懸念している。行政官の私としても決議に拘束される身だから、こうして“お願い”している」

「ゲルハルト……実権の無い政府に、物言っ口があつたとはな」

「企業が法治国家を目指した結果ですよ。私は調整役だ」

精悍で堂々とした態度の男は唇の端を僅かに歪めた。

「それだけでなく、ハーレイ・クラファへの供給は滞ってる……先日投入された第五世代チームの戦力を見てから決議に遵守するか、時間を掛けてもよいだろう」

「サハラ計画が経済的理由で行き詰まりを？」

「利潤の追求が商売の基本だ。それをコントロールするのが政府ではなかったか」

「売国奴まがいの行為は憤む、良い模範になっていただきたいですな。第五世代の<sup>ファイフス</sup>アフリカ投入もレンロウの意見を尊重した。」

「その言い方、まだ地図上に国境線を引いているように思える」

「少なくとも、あなたにはなさそうだ」

ゲルハルトに、いくらかの和らいだ空気が流れた。

レンロウ・グループの暴走は食い止められると判断したからだ。

世界統一の夢を追う、ウオクトワイズ連邦の潜在的な離反は避けたい。

「自分の利潤には疎いのが妙な官僚だ。ゲルハルト・カノーヤー」

食えない顔で、ユロが友人を評した。

郊外の高級住宅街にリムジンが一台滑り込んで、そのうちの二軒の前に止まる。

車から人が降りるのを待ちかねたように、若い女が門扉を開いて急ぎ足に近寄った。

「クライン！ お帰りなさい」

豊かな笑みを満面に、青年の腕を取る。

「ただいま帰りました。薫」

抑え気味な感情は、いつものことだ。

「いつも急だわ。ゆっくりできて？」

「今日半日だけの休暇です。今夜は泊まってよろしいでしょうか」

「いやあね。遠慮はしないで。家族なのに他人行儀なんだから……ゲルハルトは知ってるの？」

「父には知らせる必要はないと思ってますので」

控えめに、父を否定する。

「デイトマも忙しい人だし、ホントにこの家の人たちはご多忙でいらっしやること。新妻の私を放っておいていいものかしら」

アタッシユケースを運転手から受け取り、クラインの背中を押しながら薫はリビングに通した。家政婦にティーを頼むと、上着を取って座らせる。

「デイトマは相変わらず研究熱心？」

「そう。熱中しすぎて、この家が遠いせいか彼女のアパートマンに泊まりっぱなし。まあ、いいオトナだから私が言うことではないけれど……」

「父は、良くしてくれますか」

遠慮がちな気遣いを感じて、彼女は暖かな眼差しを彼に向けた。

「お父様を心配して下さってるのね。嬉しいわ。ええ、ゲルハルトは私を愛してくれているし、私も間違いなく愛してるから。幸せよ」

背中まである長い黒髪をサラと揺らして、ティーを注ぐ準備をした。「せっかくだから、少しは母親らしくしたほうがいいと思って」

薫はクラインの継母であり、クラインの父ゲルハルトの妻である。

数ヶ月前に結婚したのだと、事後報告が薫から来ていた。

クラインが幼い頃からの古い知り合いで、カノーヤー家の良き友人であったものが、妻亡き後にだいぶ経ってからゲルハルトの伴侶に納まったらしい。

「今回はいつまでウオクトワイスにいるの」

「………ですが……デイトマと仕事が絡みそうです。詳細不明なので、明日でないと何とも……」

「エ……ああ！」

仕事柄、機密の多い一家である。

薫もすぐに理解した。

「じゃあ、今晚だけではないのね」

「たぶん」

曖昧あいまいにしながら、冷めないうちにカップを手に取り紅茶を口にした。

家は、いい。

そう感じたのは錯覚さくかくだったか。

しかし、少なくともここでは人の死がない。

(疲れているのだろうか……)

昼下がりの光が、アール状の窓からつつましく射し込む。

大小の熱帯植物を配置し、東南アジア系のリゾートを醸し出すインテリア、以前はこんなに情緒豊かな家ではなかったが 薫と言つ住人を得て、彼女の趣向に染められたのだろう。

薫は、久しぶりに会ったクライアントせんざくを詮索せんさくするでもなく、ただ窓の外を見つめていた。その静寂……。

女は沈黙に耐えられないもの、との評は、薫には当てはまらないのだった。

「……奥様、お電話が入っておりますが……」

なるべく雰囲気壊さないよう、努力して家政婦が声を掛けてきた。

「出ます。どちらから？」

「デイトマ様でございます」

「あらっ。二日ぶりね」

カチャとカップを置くと、いそいそとラウンジの奥へ行く。

「デイトマ？ 連絡もいじめれど、顔も見せて欲しいわ。それともクロエのアパルトマンに家具一式送りましょうか……」

低めに、だが快活に笑う薫の声は、眼を閉じたクライアントの意識に聞こえてはいないが、音響の良い邸内ではふと耳に届いてしまうものだ。

「……いいのよ、デイトマ。……あの子は元々神経が細くて優しい人だから 無理して来なく……ええ。いつまで滞在するかまだ」

自分の話題だと気づいたのは、薫が通信を切つてからだつた。

「兄ライオンは来るのですっ？」

席に戻ってきた薫に、クラインは聞く。

「クロエと食事の約束していたそうよ……今夜は、そうね……暖かいようだから、テラスでデイナーにしましょう」

ニユアンスからして、ゲルハルトは出席しないようである。

洞察力に長けた、薫の対応はうれしい。

反面で心苦しいのは、隠したものを他人には見られたくない衝動に駆られるせいだ。

片付けるわね、と自分でカップを載せ、ワゴンをダイニングへ運んでいった薫の足音を背に、

クラインはまどろむ。

双子の兄デイトマと、亡き母と、父ゲルハルトが、揃って家族をしている。

自分もそこにいるはずなのに……話を聞いて…。

クラインは、もがいた。

溺れているかのように苦しいのに、皆は笑っているばかりで手も差し伸べてくれない。

た・す・け・て。

叫んだ。

しかし、クラインの口が言ったはずだったが

。

“タスケテッ!”

女の声で漏れ出る。

(誰だ…)

“お願い！アタシを助けて!”

必死の形相で、女がクラインの腕を掴んだ。

(!)

”あなたが!”

「クライン」

優しい声が耳元に響く。

「クライン。起きてて？」

もう一度、クラインを呼ぶ声がした。

「ア……」

「どうしたの…食事の準備ができたのよ。少し夢見が悪かったようね。日が差してたから、暖かいと思ってタオルケットも掛けなかったせい？」

薫が覗き込んで、彼の髪を撫で付けている。

多少の冷や汗を感じながら、クラインは体を起こした。

「夢を……いつものことです」

嘘をついた。

「…そう…無理とは思うけど…ここでは誰もあなたを殺そうなんて人はいないのよ。安心して甘えて さあ、着替えてきて」

用意された部屋で、クラインは堅苦しいスーツを脱ぎながら、

(あの女………?)

夢でしがみついていた女の顔が浮かぶ。

知った顔のようだったが……思い出せない…。

しかし、何となくこの先、災いになりそうな禍々まがまがしい色を為す夢をしていたのは感じる……。

どれくらい眠りこけたのか、自分の手首を持ち上げた。

時間は夕刻を過ぎていて、ふと探した部屋の時計よりも、腕時計の針が少しばかり進んでいるのを直す。

正確な時間を要求される仕事で、進み癖のついた時計はまずいだろ、と言われたことがあったが、腕に馴染んだ感触は取替えずに来ていた。

自分の時間が早く進んでいるような、急かされる感覚は止めてはいけない気がする。

「口に合う? 私はあまり飲めないから、見立ててもらったワインだけど」

テラスにセッティングされたテーブルと椅子に、贅沢ぜいたくな光を放つ蝋燭を立てたクロスの上を、いくつかの皿が取り替えられた。

「そんなことは……このもてなしに、文句は言えないでしょう」

「でも、あなたは白のくちね。この辺はデイトマの分野だし」

庭の木々の向こうには、エリアの輝く摩天楼が煌いていた。

どうにかこの安寧に浸りかけ、少しクラインの口は饒舌じょうぜつになったのだろうか。

「いまさらですけど、改めて。結婚おめでとう、を」

薫は小首を傾げて、薫はニコと微笑んだ。

「ありがとう。でも…私にだけお祝いしてるのね、それ」

心配りをしながら、ストレートな物言いは彼女の性格だ。

「ゲルハルトは、あなたにも祝って欲しいのだと思うけれど。母親って、いつも子供と父親の仲間役をするものなのかしら」

「父は…忙しい人ですから…」

クラインは、言い訳をする。「それに、貴女と言つ伴侶を得て、よりウオクトワイスの飛躍を望めるようになったでしょうし」

「クライン……………」

「貴女は、母よりも外交的だし、父をよくサポートできるでしょうから…」

「クライン」

強めに、薫は彼の名を呼んだ。

彼はフィと視線を逸らす。

「私とゲルハルトの愛情の在り方を、勝手に歪めないで。私たちは政治のために結婚したのではないのよ……彼は政治のトップで戦う人だけど、戦う英雄の妻は共に戦わねばならないの？」

おかしいわ…私たちはそんな気持ちで一緒になったのではないのよ。ただ彼に好意を持って、一緒に居たかったから、それだけの理由」

「しかし、いつかは貴女も利用しようとするとは考えない…?」

「いいえ。個々の意志は自由であるべきことを、私が証明します」

薫はそこで、悪戯いたずらっぽい瞳をした。

「クラインは深刻になりすぎ。人の愛情は、もっと簡潔に考えないと呪縛に囚われてしまうのよ。あなたも誰かを愛してみたなら判るわ」

強い女性、と見るのは間違っているのだ。と、クラインは改めて思う。

恐らくはこの一家に、どの友人たちよりも受け入れられていた薫の存在は、幼い頃から少しかけ遠くに見えるようなものだった。

客観的に家庭内を覗き込んだ彼女は、誰よりもカノーヤー一家のことを知っている。

自分が今現在、こんなにもシニカルな気分なのは、幼少時に母以外で一番身近にいたこの女性に、憧れめいた気持ちが無かったわけではない事を思い出したからだ。

特別な愛情の対象ではなくても、大事な宝物だったかもしれない記憶が、けして仲が良いとは

言えない父に踏みにじられた気もしている。

これが父と息子の関係か。

「私は…人の愛情を受けるに値しない人間です…」

人を愛せるとも言えない。こわばったような、クラインの在りよう。

まだ半分以上グラスに残るワインに、口をつけて薫はホウと溜息をついた。

「あなたは 遠くなってしまうたのね。ようやく貴方も家族になれたのに…」

深く沈んだ海のような瞳で、薫は寂しそつにした。

そんな愛情をも、受けれているのが難しいクラインなのである。

家族は、人間関係で一番難しい。

井上が来たというので、会議場には話がたら二人で行くことにした。それを狙って、彼も早めに現れたのだろう。

雲の多い天気にな風が強かったが、カートを使わずに歩くことを選ぶ。

「インドから極東に行ったかと思っていたが、戻ってきた ワケではないな」

「内容は知っているでしょう。私も『ヴォロス計画』の一部に組み込まれてますから」

「……君の父上の差し金でないことは」

「知っています。そこまで父も権力を行使しませんよ」

公然の秘密とも言えない会話で、父との微妙な確執を隠さないクラインである。

「気を遣ってるつもりもないが、いま『ヴォロス』には若い世代でなくては対応できない事実がある。表向き公募だっただろう？」

「誘いがあつたので、推薦すいせんしてもらっただけですよ。結果、能力があることは証明できました。

少しは使い物になるみたいですよ」

「俺には自慢にも聞こえんな。どうにも死に急ぎとしか見えないのは、俺だけではないだろうっけ」

精悍せいけんな顔に笑みを浮かべて、クラインの肩を叩いた。

「しかし、家族だな。デイトマからも同じ計画で技術面のサポートが得られる。心安く頼れるの

は否定するなよ。不具合で遠慮なく文句が言える 昨日、会ったか？」

「いいえ。兄も個人的に付き合いがあるようでしたので……昨夜は薫にだけ」

井上が個人的な配慮で話しているのは、分かっていた。

クラインとは十以上の年齢差があるが、父ゲルハルトも絡んでの旧友である。双子の兄ディトマよりは、より兄的な付き合いで理解者ではあった。

ただ、自分の周りの人間には、いつも父の影が付きまとう。

意識し過ぎかもしれない。

だからと言って存在を消すことは無理である。

権力者を父に持つというのは、時に精神的な負担をもたらす。

「そうか……ところで、ファイフス第五世代はテスト・パイロットが試験的に作戦投入されているが、お前はファイフス第五世代の専属になれそうか？」

「コンビネーション・テストのセミナーまでは受けました。現時点でこの場に呼ばれた事は、選から漏れたのだと思いますが……」

「そう素直に考えるな。人事も正しく機能しているわけでは無さそうだぞ。G・B・Nグレート・フルド・ネットにまともな部隊指揮官の居ない処が発生していた。部隊編成の不手際が露呈してしまったんだ。まともな頭があれば、お前も呼ばれるだろう」

「異動だけに忙殺されそうですね」

「そう皮肉るな。今居る職務は閑職ではない。適当な知識を持ち出してから前線で使え」  
「そうします」

井上と話しながら、クラインは何気にスッキリとした気分であることを意識した。  
眠りの浅い彼にしては、珍しく熟睡したらしい。

「……………ッ！ごめんなさい！」

ぶつかってはいるが、早合点した声が上がった。

見れば肩まで伸びる黒髪の少女が、慌てて地面を這うように手でまさぐっている。

「いや…私に被害は無いが……」

返しながら腰を下ろして、散らばった物を集めるのを手伝う。

「あの、いいんです。私がちゃんと見てなかったから」

井上が彼女の着ていた赤い制服を見て尋ねる。

「ラボに居るのか？」

「はい。研究生です。…じゃなかった…テストから戻されてきたものですから」

「ふうん。パイロット？」

「そんなところです。ありがとうございます」

クラインから受け取って、少女は頭を下げると駆けて行った。

その後姿を見やって、井上は笑った。

「彼女が例の犠牲者かもしれん」

「まさか」

「ありえない話ではないだろうっ？」

「……………否定はしませんか……」

「俺は、お前も犠牲者の一人だと思っているよ」

「哀れみですか」

「……………」

彼の辛辣な言い草には慣れている。と思おうとしたが、やめた。

慣れるとか反発するほど、人間関係に深入りしていないからだ。

「諦めも肝心ですよ……」

クラインは受け流した。

「素直そうで素直でない奴」

相変わらずの年若い友人を、屈託無く評する。

常々、懸念があった。

井上はこの計画の一端を担う人間として、第五世代の予測し得ない戦力を期待はしているが、一抹の不安を心に隠す。

『ゲルハルトが望んだと聞くが、第五世代に至ってまでも実験の位置づけを離れないのは』

『兵器とは常に開発途上にあり、いつの時点でも実験であるとの認識だろう』

『通常、将兵には愛国心を始めとするイデオロギーの刷り込みと、所属するところへの忠誠を叩き込まなくてはならない。思想教育を施さない者を戦場に送り込んでしまつては、危険ではないのか？』

『技術の漏洩も考えなくてはならないが、高学歴のエリートが扇情的なプロパガンダに染まりやすいのは、歴史を鑑みれば明らかだと言つのだ』

『では彼らに歴史を選択させると？しかし、戦勝を上げるか死ぬかの瀬戸際で何の利益が』

『……………歴史の選択肢を与える……そうも言える。多様で多元的なものを見方するのは悪いことではないだろうっ？』

『例えば、私は賛同者にされそうだが、一理を認めているだけだ』

『ですが、若い、と言つただけで扇情的な存在でもありません』

『選択だよ。思考をコントロールする一元的な教育では、思考が停止する。多元である事を教えて迷わせ、そこで得た答えが力となる。それを本人自身に選択させる。理屈はこうだ。敵方になつても止むを得ないだろう。だが、第五世代の指針だ』  
『理論どおりに行けば、第四世代までは、失敗作 になりますね。反対はしません。戦場で迷いが無い事を祈ります』

『望みたい事だが……』

少し前の事を回顧して、なるほどと思った。

迷っているのがある。

バタバタと駆け込んだ先は、使えるのか使えないんだか、様々なマシンのようなものが転がる異世界だった。

一瞬躊躇したが、勇気を出して踏み出す。

「デイトマ？…ああ、あっちにいるよ」

つなぎを来た男に顎で指されて、恐る恐る声をかける。

「俺？」

素つ頓狂な応答に、いささか拍子抜けした。

「レジノ先生から…ことづけで……」

「あゝ、そう。ありがとう」

そっけなくお礼を言つが、その風貌のせいか嫌味にならない。

「君、ラボに居た子？」

「あ…ギリシャ研究所からですけど」

「へえ。『パルテノン』から来るなんて、珍しいな」

「アフリカから戻されて来たばかりで……」

ふうん、とデイトマはお使いの少女を見つめた。

「ッてことは、期待されてるパイロットなんだな。名前聞いていい？」

「シャトレイサです。作戦投入されたんですけど、コントローラと相性が悪くて…調整を受けてます」

「それは俺の分野じゃないなあ。クロエがやってるトコのかな。あ、俺ね、『ヴォロス』のマシン製作に携わっているデイトマ・カノーヤー。君…シャトレイサが第五世代なら、俺の愛がこもっ

たマシンに乗ってるかも」

「その第五<sup>ファイフス</sup>世代です。ごめんなさい。あまり上手に扱えてないみたいで……」

恐縮するシャトレイサに、デイトマは汚れたつなぎを着、乱れたままの髪で人懐っこい笑顔で、何の、と言った。

「誰だって完璧な奴はいないよ。敵も味方も必死で戦っているんだから、マシン一つで悩んでたら負けだ。生き残ることだけ考えろよ」

初対面で、マシンを組み立ててるだけのエンジニアぐらいにしか見てなかったから、シャトレイサには軽々しく言ってるように感じた。

個人の重大な感じ方が、適当な慰めにもならない言葉で決め付けられる。それは勘に触る。

(アタシは……まだ死体を見てない……)

おぞましくも受け入れなくてはならない、生々しい現実を知るには、それが手っ取り早い方法だと思っていた。

「それで、コントローラと、なぜ相性が悪いと思うんだい」

唐突に聞かれて反発心とは裏腹に、シャトレイサは答えていた。

「なぜ……って……あれは、私を頭から押さえつけて従属させようとするんです。従えば楽になって簡単に言われますけど、それは許されないことに思えて」

答えながらも、酷い言い訳をしているように思える。

「それって、我が強いつて言つか、プライドが高いつて奴だね。裏を返せば防衛心が強く、

または臆病……とも言つかね」

ストレートにデイトマは言ってるのける。

「否定はできませんけど……」

自分でも思い当たってることだが、他人の口から出るのは許せないところだった。

だからと言って反論の術も無いのが、シャトレイサである。

「……失礼します」

早々に退散を決め込んだ。

この人は嫌いじゃないけど、嫌い……。

断わりも無しに、自身の領域を踏みじられた痛さを感じた。

もちろん、被害妄想もいところだろう。

そんな小柄な少女の後姿を見送って、デイトマはちょっと溜息をついた。

「どうした？何だそれ」

同じ格好のメカマンが、興味深そうに近づいてきた。

「あ、これか。レジノからのお土産だろ」

「旨いもんなら食わせるよ。あの子、パイロットかい？」

「そうらしい。……ああいう子も戦場に出るんだな」

「何か神経質そうじゃないか？ヴォロスのだろ？」

「第五世代だよ。ウオクトワイスの期待を背負つ星さ」

「何を基準に彼らは選ばれたのかねえ」

他愛なく、他人事の会話ではあるが、デイトマは少しだけ引かかった気がした。

（あの感じつてのは……クラインみたいなヤツ……）

「でも、俺の弟も彼女と同じくらいの歳で、戦争に放り込まれてるからなあ……」

「敵しい親父さんにか？」

「俺は、徴兵<sup>レ</sup>を免れたけどな。ああーまた俺、一言フォローにならない事言ったなあ」

冗談の雰囲気を作って、軽く収めた。

ただな、親父が期待をかけてたのは、弟だったんだろうが

。

嫌悪しながら、優しい眼差しを感じるのを背に置いて、シャトレイサは研究所の教室に戻りかけた。

（嫌な人に会った……）

自分に下手な言い訳をして、かすかな動揺を誤魔化した。

（忘れなさい。忘れるの。覚えてたら恥ずかしいことじゃない……！）

膝周りに纏いつく、赤い制服のタイトスカートが気になる。

脇の布地を一握り、掴んで裾を持ち上げると大またで爪先<sup>つまさき</sup>を出した。

彼女の歩く癖は、他人の視線を気にしたような歩き方をする。

誰にも声を掛けられないように、なるだけ忙しいように、真っ直ぐ前だけを見るのだ。そうすると周りの人間は遠慮して素通りしていた。

増してここは以前居たギリシャじゃないから、ソトーやミレイヤも居ない。

（いやだな……どうして歩いてるんだろ……）

早く自分の場所に戻りたかった。

カート・プールに丁度、一台入ってきたので逃げ込むように、車内に体を滑らせる。狭い車内は、時に居心地が良い。

闇雲に走りたくなった。

このカートでは研究所から出られないが、『パルテノン』研究所より更に広大な敷地のため、乗り回すには充分である。

手の込んだ庭園内を走らせていると、シャトレイサがぶつかりそうになった二人の姿が見えた。

「のんきに歩いている……」

もちろん、二人の事情など知らない。

さつきは慌ててよく見てなかった。

そのせいもあって、何となく凝視したのかもしれない。

…………… 風がよぎった。

「」

シャトレイサの乗る、カートが起した流れだったか。

一瞬にすぎない時間に、ダーク・ブラウンの髪色をした青年が振り返る。

互いの視線が、交差した。

（ 誰かが……見ている ）

自分の居る空間だけが止まったように、体が硬直したみたいな錯角が彼女を襲つ。

（……違う……？ 知っている……？）

自我を抑えたような、そんな彩(いろ)の瞳から、洩れ出た感情の揺らめき。

（……知ってる。この人は ……あなたも知ってるでしょう……）

手を差し伸べれば、相手も差し出して捉えてくれそうな近さを感じていた。

何かが融合して、ゆっくりと融けていくような気だるい心地よさ。

ワタシハ、ココニイルカラ……

心惹かれる甘さに似た、ほんの二、三秒の時間で、スイ、とカートは彼の後ろ数メートルを通り抜けた。

不思議な感覚を残して、二人はすれ違う。

**【MISSION 1 未来のサステナビリティ】**